

令和5年度秋田県政策評価委員会研究評価専門委員会 議事録

1 日 時 令和5年8月25日（金）10時～12時

2 会 場 秋田県議会棟1階 大会議室

3 出席者

研究評価専門委員会専門委員（五十音順）

安藤 大輔 株式会社安藤醸造代表取締役社長

寺境 光俊 国立大学法人秋田大学大学院理工学研究科・研究科長

高田 克彦 秋田県立大学木材高度加工研究所長

高山 裕子 聖霊女子短期大学生活文化科教授

宮田 直幸 秋田県立大学生物資源科学部生物環境科学科教授

山口 誠之 国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構
東北農業研究センター 研究推進部長

吉澤 結子 秋田県立大学名誉教授

（企画振興部）笠井次長

（総合政策課）高橋課長、佐々木政策監、渡邊チームリーダー、

（試験研究機関）

総合食品研究センター：樋渡主任研究員、梅川研究員

健康環境センター：小林主任研究員

農業試験場：小松企画経営室長、三浦副主幹、高橋主任研究員

果樹試験場：照井上席研究員

水産振興センター：三浦総務企画室長（兼）資源部長、寺田技師

林業研修センター：長岐環境経営部長

産業技術センター：熊谷上席研究員

（所管課）

食のあきた推進課：田仲主事

環境管理課：鈴木チームリーダー

農林政策課：相澤主査

地域産業振興課：山平チームリーダー

●吉澤委員長

初めに事務局から議事(1)「秋田県の研究評価制度及び評価基準等の変更について」の説明をお願いします。

□高橋課長

【資料1により県の研究評価制度の概要について説明】

【資料2により評価基準等の変更について説明】

●吉澤委員長

ただいまの事務局の御説明について御質問はございませんでしょうか。特にございませんようでしたら、次の議題に進みたいと思います。

それでは議事(2)「令和5年度に実施した研究課題評価の結果」について、事務局から説明をお願いします。

□佐々木政策監

【資料3により令和4年度に実施した研究課題評価の結果について説明】

●吉澤委員長

それでは、発表課題を2課題説明していただきます。

まず、中間評価の発表課題について説明をお願いします。

□農業試験場

【資料4により中間評価『実需に応じた秋田米生産を支える病害虫防除技術の確立』について説明】

●吉澤委員長

ありがとうございました。ただいまの研究課題の説明につきまして、御質問、御意見等ございましたらよろしくをお願いします。

山口委員をお願いします。

◎山口委員

非常に多岐にわたって技術の紹介をしていただいて、どれもすぐに生産現場で活用できそうな印象がありましたし、興味深く聞かせていただきました。

多収性品種の中で、「ちほみのり」は斑点米のリスクが移植栽培では高く、直播栽培

では低いという成果が出ていましたが、これは他の品種でも起こっていることでしょうか。

□農業試験場

「あきたこまち」でその現象を事前に捉えています。その理由としては、米の籾殻のサイズが決まる時期である7月下旬の減数分裂期から米の中身が入る登熟期間に遭遇する温度がどういうところなのかが重要で、直播ですと登熟期間が盆過ぎになることがあるので、緩やかに登熟、実の入り方になるということで、籾の割れるリスクが少なくなるということが分かっています。

移植栽培と直播栽培でリスクが異なってくるところを「あきたこまち」で捉えていたのですが、「ちほみのり」においても、同じような現象を確認できたという内容になります。

◎山口委員

ありがとうございます。直播栽培で、登熟が遅くなることよって割れ籾の発生率が少なくなり、それによって斑点米の割合も低くなるということだと理解しましたが、その分、収量や品種に影響があるのかもしれませんが。斑点米を下げる技術として、直播栽培が有効であるということが「あきたこまち」でも示されたのであれば、そこも強調できるのではないかと、もっとアピールしてもいいのではないかと印象を受けました。

また、高密度播種苗でイネミズゾウムシの結果が出ていましたが、いもち病の効果が分かりませんでした。まだ調査・研究をしていないということでしょうか。

□農業試験場

例としてはイネミズゾウムシしか出していないですが、この対象としては、いもち病とイネミズゾウムシを扱っておりまして、いもち病も問題ないということは確認しています。

◎山口委員

発表資料にないだけで、データはあるということですか。

□農業試験場

資料には記載していませんが、データとしてはあります。

◎山口委員

分かりました。

マルチローターと無人ヘリの比較で、防除効果が同じというデータが出ていましたが、かかる時間やコストの比較も必要です。マルチローターの方が良さそうな気もしますが、その辺の数字は出ていますか。

□農業試験場

無人ヘリもある程度の速度で飛べるので、時間はそれほど大きな差はないと思っています。ただ、導入時のコストについては、マルチローター本体で約 200 万円、無人ヘリは約 1500 万円かかるというような現状です。最近では市町村の補助もあることから、現場でマルチローターの普及が進んでいます。ただ、マルチローターはバッテリーで飛ばすことになるので、一つのバッテリーで飛ばす時間には限りがありますから、大面積をカバーするにはやはり無人ヘリが主体になるのかなと思っています。

◎山口委員

つまり、状況によって使い分けているということでしょうね。

□農業試験場

はい、そのとおりです。

◎山口委員

斑点米カメムシ類のモニタリングでコムギ幼病を用いた検定をしていますが、これは、オリジナルの検定方法ですか。

□農業試験場

はい、そうです。コムギの幼苗を用いた検定というのは、そもそも飼育をするときにコムギの幼苗を使うこともあります。この検定法については、オリジナルの方法で、学会でも発表している内容になります。

◎山口委員

イネでは駄目なのですか。

□農業試験場

イネよりもコムギの方が使いやすいです。

◎山口委員

使いやすいというのはどういう意味でしょうか。

□農業試験場

簡単に発芽してくれることや、種子予措もいらなところす。

◎山口委員

もみ枯細菌病対策として育苗箱の消毒が有効である点について、これは当然だという感じもしますが、これまで面倒でやってこなかったという話を聞くと、それももっともだと思いました。これに対する解決策はどう考えているのでしょうか。

□農業試験場

県内で大規模な農業法人が増えてきております。そうなってくると、消毒作業がおろそかになってしまうことが多いです。一度、病気が出た育苗箱には居着いてしまうことがあるので、消毒の必要性を農家にきちんとお示しして、消毒は必要なのですよということを指導しています。指導できるような資材も消毒剤もありますので、そういうものも合わせて、農家の指導に当たっています。

◎山口委員

分かりました。ありがとうございます。

●吉澤委員長

では他の委員、いかがでございましょうか。寺境委員お願いします。

◎寺境委員

色々な個別の技術があり、実際に農家に役に立つような成果が得られているなど感じました。

今回発表があった防除技術はどの品種に対して見ていたデータなのでしょう。例えば、高密度播種苗やマルチローターの話などが出てきたと思うのですが、どの品種に対する試験をしているのか説明をお願いします。

□農業試験場

品種については業務用米ですので、エコノミー領域の品種を使つての試験を行いました。

◎寺境委員

今日示していただいた結果はエコノミー領域に該当するもので、それらの品種のデータを取ったときの結果ということになるのですか。

□農業試験場

ほぼその通りです。ただ、例えば、あきたこまちでも応用が利くようなものについては、「あきたこまち」を使った試験もあります。

◎寺境委員

発表の最後の方に他の品種、「しふくのみり」にも試していくという話をしていましたし、「萌えのみり」は多収性がいいわけですか。

□農業試験場

多収性品種として有効です。

◎寺境委員

それを切り替える必要があるわけですね。よりいいものに、ということですか。

□農業試験場

そうですね。もしかすると現場の方では、もう少しもち病に強い品種が欲しいということで、「しふくのみり」というような選択で、現場での普及が進んでいる、という話は聞いております。

◎寺境委員

今日示していただいたのは業務用米等を使って、主に調査したデータであるという理解でよろしいですか。

□農業試験場

そのとおりです。ただ、この技術というのは、業務用米だけに収まる必要はないと思っているので、例えば、「サキホコレ」に応用できるものは積極的にそちらにも展開していきたいという考えはあります。

◎寺境委員

分かりました。ありがとうございます。

●吉澤委員長

発表スライドの中のそれぞれに、どの品種だということの記載がなかったので、今の御質問が出たのかなと思いました。

その他、どなたかございますか。高山委員お願いします。

◎高山委員

簡易な検定に関する質問です。簡易と言っても様々だと思いますけれども、農業者でもできるという意味でしょうか。そういう意図の簡易であるのか。あるいは、安全性とか素早くできるという意図もあると思いますが、どういった意図を目指したものなのかを教えてください。

あともう1点、ニーズにも関連するかと思いますが、気候が変動して、カメムシの大量発生など、秋田県でも昨年7月辺りから注意報も出ていたかと思いますが、5年間の研究で、ニーズに変化があったのか、調査方法や研究内容に変更があったかどうか教えてください。

□農業試験場

一つ目の質問の検定方法についてですが、目指したところとしては、農協などでもできるような方法を考えました。特に、特殊な機械を用意しなくてもできるような方法というところに主眼を置いて、これをデザインしました。一般的な検定を行うときには、特殊な機械が必要な場合があるため、機械がなくてもできるよう目指したものになります。場合によっては農業者でもできるようなものです。

二つ目の質問ですが、近年の高温によるカメムシとニーズの変化について、確かに高温になるとカメムシの発生は多くなります。

ただ、農業者には幅広く発信していますが、「あきたこまち」は、割粃の隙間の出方が日本一多い品種になりますので、日本一加害されやすい品種を栽培しているのが秋田県という現状にあります。そのため、このカメムシの問題は、今に始まったことではなく、以前から高いニーズとしてあります。それに加えて虫の発生も多いという状況もありますので、近年、ますますこの課題に対するニーズは高まっています。

◎高山委員

研究方法等に変更するところはないのでしょうか。実験方法などにも変化はないので

しょうか。

□農業試験場

方法については色々なニーズが変化しています。例えば、カメムシの多発要因として、雑草が多くなると実はカメムシも多くなることが最近分かってきましたので、殺虫剤以外にも、除草も重要だという新たなニーズも出てきており、その点についても併せて今、研究をしています。

◎高山委員

ありがとうございます。

●吉澤委員長

他にはよろしいでしょうか。高田委員お願いします。

◎高田委員

通常 of 移植作業を無落水移植に変えたところについて、殺虫剤のない場合とある場合と比較されています。そもそも、移植する方法をICTを利用した方法に変えていくというのは、流れとしては正しいと思いますが、通常 of 移植の効果が薄れていないかというのは、データとしてお持ちだったら示していただきたいです。

□農業試験場

今回の発表資料の中には入れていなかったのですが、通常 of 田植えも併せて試験をしています。通常 of 田植えの場合も、効果の問題はない、同じような効果が出ているということですが、

◎高田委員

そもそもの通常 of 田植えから、ICTを使ったものに移行しても効果は変わらないということですね。無農薬との効果の比較ではないと思うので、図「根部に寄生する虫数の比較」は、無農薬と比較して、一緒に農薬が流れていないよね、という調査にはなるのですが、移植方法を変えることの有効性を証明している図ではないような気がしたので質問をさせていただきました。

あともう1点、高密度播種苗に関して、図「高薬量化による防除効果の向上」の10a当たりの投下農薬量が前ページと異なり、この図ではなぜ端数が出ているのですか。

□農業試験場

この試験の中では詳細に農薬を何箱使ったのかを記録して調査していました。そこで、具体的な数をカウントしているのです、説明した8箱は一般的な話だったのですが、実際に使用した量の計算によるデータになります。

◎高田委員

何度か実験をされていったときの平均ということですかね。

□農業試験場

はい。そのとおりです。

◎高田委員

ありがとうございます。以上です。

●吉澤委員長

それでは、そろそろ時間になりましたけれどもよろしいでしょうか。この課題に関する質問は以上といたします。

次に、事後評価の発表課題について説明をお願いしたいと思います。

□産業技術センター

【資料4により、事後評価『導電性を持つ次世代型多機能セラミックスの開発』について説明】

●吉澤委員長

それではこの課題に関する御質問、御意見等よろしくお願ひします。

宮田委員お願ひします。

◎宮田委員

御説明いただきましてありがとうございました。

セラミックスに導電性を付与することによって放電加工が可能になったことは、素晴らしい技術が開発されたのだろうなと思っています。また、今日はお示しされていなかったのですが、学会等での発表もかなり積極的にされているようで、成果の普及や発信も大変素晴らしいと思いました。

質問の一つ目は、炭化タングステン以外のTiC、SiCでは導電性を付与できな

ったということですが、タングステン、WCだと添加量によって導入性が変わってくるということだったので、他のものについても添加量を変えると、もう少し導電性を付与することができるのかどうかをお聞きしたいです。

また、もう1点、導電性を付与するということでは、WCの添加によって達成されているのですが、その結果、例えばヤング率が上がったたり、脆さが抑えられたりという効果も出てきているということで、そういった性質があることで積極的にこのセラミックスを使っていこうという方向に働いていくものなのではないでしょうか。

□産業技術センター

最初の御質問でTiCなどの他の炭化物は、添加量を増やしていけば、導電性が確保できるのかというところですが、現状は、導電性の物質をどんどん入れることによって体積率が高まっていき、導電性が確保されて、放電加工が可能になると考えられます。

しかし、難しい部分がありまして、TiCを増やしていきますと、焼結性が悪くなるとそもそも固まらないという問題があります。

本当ですと、実験の第1弾としては、まず焼けるかどうか、焼結できるかどうか、前提としてクリアしなければいけないのですが、そもそも材料にできない問題がWC以外でありました。少ない量ですと焼結が可能なのですが、どんどん添加量を増やし、導電性が確保できる部分まで増やしていきますと、焼結材料ができませんでした。それを全てクリアしたのが今回紹介したAlN-WCで、そういう位置付けとなっております。

次の質問に関して、WCを入れたことによってヤング率や壊れにくさ、脆さ、硬度が非常に改善された点ですが、今回想定している工具などの構造材料に関しましては、その導電性が付与されることも大事ですが、機械的な強度というものが必要になってきます。ですから、硬度や脆さが改善されたということは、工具材料や金型材料に採用されやすいという、いい方向に働いていると言えます。

◎宮田委員

ありがとうございました。WC以外のものについても、添加量を変えた詳細な検討結果があって、その結果としてWCを選抜したという理解でよろしいですね。

□産業技術センター

はい。そのとおりです。

◎宮田委員

これは知財化されているのでしょうか。非常にいい技術なので、そのあたりどうなの

かなと思ったのですが。

□産業技術センター

学会発表や論文発表で形にはしていますが、まだ知財化はできていないので、今後、検討していきたいと思っております。

●吉澤委員長

他にいかがでしょうか。山口委員。

◎山口委員

今の知財化の話ですごく気になったのですが、公表してしまったら1年間猶予はありますけれど、その辺大丈夫なのでしょうか。

□産業技術センター

具体的な製造プロセスまで踏み込めていないので、そこもまとめ次第という形になると思います。

◎山口委員

公表した部分については届出しなければいけないので、計画的にやっていただかないと。秘匿するわけにもいかないと思うので、競争相手も色々いるのですよね。そういう中で、使われてしまうリスクはあるのかなと感じました。

□産業技術センター

今後、知財化に向けて計画的に進めたいと思います。

◎山口委員

もう一つ、コストについてです。従来セラミックスに対して、今回の複合セラミックスはどのくらいコストがかかるのでしょうか。

□産業技術センター

数値化できていないのですが、コスト面で言うと、加工コストが今まで加工しにくかった部分が改善されています。

加工部門に確認した上での結果にはなりますが、加工コストは、セラミックスを切削加工する時間に対して、2倍から3倍程度は向上しているのかなと思います。

◎山口委員

複合セラミックスを作るコストは結構かかるのではないかと思ったのですが、どうでしょうか。

□産業技術センター

今回、通電加圧焼結技術を用いているのですが、これは通常のセラミックス材料と同じような作成方法になり、通常は大量生産する場合の加工コストとの比較はまだできていないので、そこは今後の検討課題だと思います。

◎山口委員

製造コストがかかったとしても、今後、加工しやすいセラミックスということで、そこでの利用やニーズが増えてくるとコストも下げられていくことになると考えているのでしょうか。

□産業技術センター

はい。そうなるかと思います。

●吉澤委員長

では、寺境委員。どうでしょうか。

◎寺境委員

窒化アルミニウムに炭化タングステンを 15%ぐらい添加すると加工可能になるということで、当初の目標が達成できて、非常に効果も明確だと思うのですが、窒化アルミニウムに対する炭化タングステンの添加効果という観点で、逆に炭化タングステンそのものに対して、どういうアドバンテージが出てくるのかという点がわかりませんでした。それはコスト的なところなのですかね。

窒化アルミニウムの方が圧倒的に安い材料で、WCは非常に高価なのでという、そういうニュアンスでいいですか。

□産業技術センター

代替材料としての可能性もあるとは思っております。通常ですと、WCの焼結助剤としてコバルトなどが用いられますが、そのコバルトを使わずにAlNを入れて、焼結もできることが分かっていますので、WCに対してのアドバンテージとしてWC量を減ら

せるとか、レアメタルを減らせるというところがあります。

◎寺境委員

その辺のメリットがあるということですね。

●吉澤委員長

高田委員お願いします。

◎高田委員

質問の前に1点指摘をしておきます。ヤング率について壊れにくさというように説明をされていましたが、ヤング率は荷重-たわみ曲線の初期勾配の話なので、これはたわみにくさの話で、壊れにくさの説明ではないと思います。例えば、靱性の話をされるときに壊れにくさと表現されても良いと思いますが、ヤング率の話をされるときには、たわみにくさであって、そこは間違えてらっしゃったと思います。

続いて質問です。良いものができたというのは私も理解したつもりなのですが、この先の事業化を考えたときに、破壊靱性もヤング率も、数字自体は対象に対して上がっているのだけれど、事業化のときに、どれぐらい強度が欲しいか、どれぐらいの数値を目標にしているのかというのが重要になると思います。今回この実験をされている、研究をされている期間内に、目標値は設定されたのですか。強度値がすごく重要だとおっしゃっていたので、どういうところを想定されて、何か目標は置かれていたのでしょうか。

□産業技術センター

通常の工具として使われている、例えば超高金やサーメットなどの数値を目標としました。サーメットですとヤング率が450程度なのですが、それを目標として、まず450に近づけるという目標でやっていたのですが、WCを多くした場合に、それが達成できているかなと、よく言えば少し高い数値が欲しいところはあるのですが、WCのヤング率が非常に高いので。

◎高田委員

素晴らしいデータだと思いますので、公表する際の図などに、今使われている他の材料に置き換えたときに求められている数値を線で引いて、ここはもうクリアしていると記載することで、これを民間に出していくということを想定すると、求められている強度値みたいなものを最終的なところでは出された方が、成果の有効性や効果がすごく分かりやすくなるのではないかなと思って聞いておりました。

□産業技術センター

ありがとうございます。

●吉澤委員長

この素晴らしい材料を見つけられたということで、県内企業への技術移転など、そういったようなことはもう始まっているように先ほど口頭でおっしゃっていましたが、どのようなものか差し支えない程度で教えていただけますでしょうか。

□産業技術センター

直接的な材料の技術移転は、工具メーカーやプレス金型などの加工屋などと相談しながら、まだ形にはできていないのですけれども進めていきたいと思います。研究会も通しながら進めていきたいと思います。

あとは本研究で得られたコア技術というものは、例えば、熱処理の技術であれば、熱処理炉を使って温度をコントロールしながら、金属材料を適正なものにしていくことであったり、成分分析であれば、例えば、会社で製品に異物が混入してしまいました、この成分が何かといったところの相談であれば、そういった手法というのを会社に移転しまして、やり方を説明して、実際に異物解析といった解析のアプローチの仕方から、装置の使い方なども会社、企業の方に積極的に移転するような形で進めています。

●吉澤委員長

分かりました、ありがとうございます。よろしいでしょうか。

では、この発表課題に対する質疑をこれまでといたします。ありがとうございました。

それではこのほか発表課題以外の課題について、また評価結果全体について御意見、御質問等がございましたらお願いします。安藤委員お願いします。

◎安藤委員

事後評価の「微細気泡を利用した新食感食品の開発と応用」について、C評価と非常に残念な結果だったのですが、なぜ、私どもの醤油の業界にこの話がなかったのかなと思いました。

すでに他県ではこういう泡の醤油を開発していますが県内ではやっているところが少なく、非常に有効な技術ではないかなと思いました。お話があったのかもしれませんが、いずれ私は存じ上げなかったものでした。

一方で、県内では、減塩運動が非常に盛んに行われていて、醤油が一番の悪玉と言わ

れてやり玉に挙がっています。どうしても秋田県人は醤油をいっぱいかけて食べる傾向にあるので、我々としても薄塩や減塩の醤油を開発しているのですけれども、そういう醤油を作るとしょっぱさが足りないと言って、ますますかける、非常にうまくない状況です。こういったときにこの泡の醤油があれば、減塩運動に対しても非常に効果的であったろうし、我々製造業者にとっても非常に有用な技術だったのではないかなと思ひまして、非常に残念だったなと思ひています。

先ほどのセラミックスの話もそうですけれども、非常に有用な技術、シーズがあっても、それとマッチングするニーズがうまく合わないと宝の持ち腐れになって、第一義的には県の研究機関は、県内の事業所のためにあるわけですから、そのニーズをうまく汲み上げて、そのシーズを応用しない、できないことが非常に問題です。

この研究全体についてもそうだと思うのですが、せっきくのシーズをどのような県内事業者のニーズに応じていくのかという研究の明確化、応用先の明確化が、今後、この技術に限らず必要なのではないかなと思ひました。

●吉澤委員長

ありがとうございました。ただいまの御意見について、事務局ではいかがでございましょうか。

□高橋課長

貴重な御意見ありがとうございました。委員がおっしゃった研究につきましては、また何かあれば情報共有ができるようになればと思ひますし、県内の各事業者のニーズとシーズをマッチングさせていくというようなことは大変重要なことだと考えておりますので、御意見を承って、またその研究機関と関係する業界団体との情報共有を検討していきたいと思ひます。

●吉澤委員長

では続きまして、高田委員お願いします。

◎高田委員

評価に関してですが、この評価の仕組みが悪いというわけではなくて、研究というのは、技術的に超えられなかったから成果が出なかったということもあるかもしれませんが、今の例のように、例えば何件の成果を外へ出しますよという件数的に到達できなかったから、評価が下がるという例もあると思ひます。

昨年も話があったと思ひますが、私が危惧しているのは、県の試験場でチャレンジ

グな研究がどんどん縮小されていくような方向になると非常に良くないと思っております。研究自体の評価はきちんとすべきだけれども、研究評価を気にするあまり、研究者のアイディアで大きなことが展開できるような、チャレンジングな気持ちを失ってしまうようなことになると困るなどは思っています。

評価に関しては、技術的にどういう問題があったのかを内部で検証していると思うし、それと同時に、数値化を求めて、10件やりますという目標に対して7件だったからBで、というのは公金を使っているのではないと思うところもあります。他の委員はどう考えてらっしゃるのか分かりませんが、そこは厳しくすると、研究者の自由な発想というか、チャレンジングなことがなくなってしまうのではないかなと思っております。

●吉澤委員長

なかなか難しい問題で、特に公設の研究機関ではなかなか難しい課題かと思いますが普遍的にあることではないかと思っております。いかがでしょうか、事務局。

□高橋課長

委員がおっしゃるとおり、評価として、評価基準に則って評価をしていくということだと思います。研究課題についてもその研究をどういう位置付けでやっていくのか、そして、中間評価でどういった評価をして、事後評価でどうだったかということも、まずは透明性を確保して、県民の皆様にお示しするのは県として必要なことですので、それを淡々とやっていくことだと思っております。

一方で評価が悪くなることを恐れて研究自体にチャレンジングになれないということがあってはならないと私も思っております。

おそらく各研究機関では、そういうことではなく必要な研究課題を抽出しながら、進めているのだらうと感じておりますので、今後ともそういったところで応援していただければと思います。

●吉澤委員長

研究員の方の書かれた計画書の中でも明確に技術移転が何件と高らかに宣言してらっしゃるところもあれば、ある程度その見込みがついたということもあるでしょうし、定性的な成果の見通しというような書き方のところも結構あるのかと思えました。それぞれのテーマで難しいところがあるというのは皆さんが感じているところかと思いません。研究員の方々もそうではないかと思えます。

意見ではなく感想になりますが、先ほどの高田委員がおっしゃったような、非常に関

心興味があるとか、新しい発見、学術的、素晴らしい研究内容だったときに、この専門委員会とはまた別のところで評価や奨励、表彰するような制度があってもいいのかもしれないと思います。

他に評価全体としまして、評価の方法を変更後、今年度初めての委員会でございまして、書き方なども大分変わったように思いますけれども、何か御意見などありますでしょうか。

山口委員、いかがでしょうか。

◎山口委員

私は今年度初めてなもので、C評価が出てきた点について確認させていただきたいのですが、今回の例ですと、事後評価では研究が終わっているわけですね。それでC評価になった。その場合は、そのあと何があるのでしょうか。BとCの違いは何なのでしょう。予算が減らされるのでしょうか。

□高橋課長

一連の研究の中で評価をしており、この結果を公表して、県民の皆様にもお知らせするということが大きなところでありまして、その予算が減らされるということに繋がるということではございません。

◎山口委員

安藤委員が言われていますけれども、ファインバブルの研究課題も使える可能性は十分にあるということであれば、その情報は公開して、もし希望者がいれば使っていただくことはできるということですか。

□高橋課長

はい。おっしゃるとおりでございます。

◎山口委員

Cとなったけれども、目標に対しての評価であって、内容としては決して悪いものではないですよ、という理解、観点で見てもらえれば、次のところに発展するという可能性あるのかなと思います。

□高橋課長

おっしゃるとおりだと思います。先ほどの研究についても、何かまた今後、昨年度で

研究自体は終わっていますけれども、そこからまた新たなところと繋がっていく可能性もあると思いますので、その研究としては一旦終わりましたけれども、そういう研究があったということで、またどこかの業界と繋がったりとかですね。何か応用できるということがあれば、そういうつながりがあるのかと思います。

◎山口委員

中間評価でCだった場合はどうなるのでしょうか。

□高橋課長

中間評価でCだった場合は、その時点の評価でCだということにはなるんですけども、冒頭の評価基準等の変更の説明でもお話をしましたが、それはそのときの評価であって、そこからまた目標に向かって研究を進めていただくということなので、あくまでもその時点での評価という位置付けになっております。

◎山口委員

分かりました。これもCだったから、そのあとの予算が減らされることはないということですね。

□高橋課長

はい。明確な連動ということはありません。

◎山口委員

最終的に、事後評価でBになったりあるいはAになったり、そういうこともあり得るということですね。分かりました。

●吉澤委員長

宮田委員どうぞ。

◎宮田委員

調書のフォーマットで、外部有識者等の主な意見及び対応方針という項目がありまして、外部有識者の様々な意見があって、それに対する対応方針という形で各調書に載っていますが、この対応方針というのは、担当者がそういう方針を立てられているのか、あるいは、その事業所内で、その意見に対して、一度持ち帰って、オーソライズした形の対応方針ということになっているのかを確認させてください。

また、外部有識者の貴重な意見にできるだけ対応していくのは非常にいいことだと思いますが、その課題によっては、特にその対応方針というのがはっきりと書かれていない課題もあつたりして、対応方針と書いてある以上は、きちんと対応方針を書いた方がいいのではなかろうかと思っているのですが、いかがでしょうか。

□高橋課長

外部有識者等の主な意見及び対応方針につきましては、こちらとしては当然ながらその各研究機関の中で、こういう対応方針でいきますということでオーソライズされたものと認識しております。

その内容につきましても、調書もかなりあるので、こちらでもある程度チェックはしているのですが、しっかりと対応方針として記載していただくように今後も各研究機関をお願いをしていきたいと思っております。

●吉澤委員長

ありがとうございます。今回の変更点で、阻害要因はひとまとめになったところは、分かりやすくなったのではないかと思いますし、書く方も、読む方も分かりやすくなったのではないかと思います。さらに、研究員の方々とか、事務局の方でも御検討いただいて、今回の変更について、振り返っていただければと思います。

その他よろしいでしょうか。では、特に追加はないようですので、これにて質疑はよろしいでしょうか。

様々な御意見をいただきまして誠にありがとうございました。

それぞれの課題についていろいろ御指摘や御意見などがありましたけれども、県の自己評価のチェックという観点からは評価結果について異論はなかったと思いますので、事務局からの報告のありました令和5年度研究評価結果については妥当であるということによろしいでしょうか。

【委員一同異議なし】

●吉澤委員長

それでは、令和5年度の研究評価結果について承認をいたします。

本日予定されている議題は以上ですが、その他皆様から何かございますか。

その他ということで、私から質問で、評価調書に総合食品研究センターの工事であるとか、農業試験場の人工気象器の不具合といったことがありましたけれども、また研究

ができるようになっているものかどうか心配いたしましたけれども、いかがでしょうか。

□農業試験場

人工気象器については5台ありまして、試験の内容によっては使えるものもあるのですが、まだ予算の関係上、直っていない状態でございまして、できる範囲内で試験をやっているという状況にあります。予算も優先順位がありまして、すぐに直せないというのが現状です。

□総合食品研究センター

御質問はおそらく排水施設のことだと思うのですが、6月の補正予算で仮設の設備について予算をつけていただきました。法律上の管理機関が秋田市になるものですから秋田市と交渉して、間もなく手続きが終わり、排水を本格的に再開できるような状況になるかという段階でございます。

今、仮設の分に関しての手配が終わった状態ですので、今後、補正予算等で本格的な復旧工事をお願いしていくという形になるかと思えます。

まだ完全にという形にはならないのですが、間もなくほぼ100%で試験研究を実施できる状況になるかと思えます。

●吉澤委員長

評価とは直接関係がなかったんですけれども、進捗について気になりましたので、お伺いしました。

それではこの委員会の議事、議論につきましては特に追加はないようですので、議事はこれで終了いたします。どうも皆様ありがとうございました。

なお、本委員会の内容につきまして、会議録案作成後に、各委員に確認をしていただきます。よろしく申し上げます。事務局にお返しします。

□事務局

それでは以上をもちまして、令和5年度秋田県政策評価委員会研究評価専門委員会を閉会いたします。

御審議いただきありがとうございました。